擬似音声表記について

河　野　純　一

さまざまな言語において、文字表記と現実の発話音声との一致度は、きわめて多様であり、相互に一対一の関係にあることは、まずありえない。文字という手段を通した場合、語彙の語源、また語彙自体の歴史的変化の過程が、そこに残されていることもあり、文字表記はそうした面をもちながら、他方、実際の発話の記録媒体としても用いられるため、矛盾する要素をはじめから内在させている。しかも、ことばが音声化された際の、個人的・地域的差異、複数言語間の音声的特徴の相違までも、完全に表記していくことは、ほとんど不可能に近い。

もちろんさまざまな差異の表記問題を放棄したところにしか、文字表記体系というのは成立しえないものであるといえるし、そこにおいてのみ、共通語としての正書法が確定しうるものである。そこで現実には、日本語の正書法と実際に発話される音声との関係を例に出すまでもなく、正書法で表記されたとおりには発音されるわけではないということが起こっているという点にも留意しておく必要がある。

正書法と発話音声との間の不一致、あるいは正書法が現実の音声を十分に表していないという現象は、むろん共通語についても往々にして見受けられることであるが、方言あるいは方言的な色彩を帯びた発音において、とりわけ一層注目されるところでもある。方言によって文あるいは詩を書こうとする場合、あるいは方言的な面を強調して表記する場合には、方言的な発音を、できるだけ実際の発話音に近いかたちで表記しようという試

みが行われることになる。

新聞などでも、オーストリア人の発話をそのままのかたちで記そうとする場合には、あえて標準的なドイツ語と違った書き方を採用し、方言的な色彩を出そうとしている。

'Macht nix', hat er gsagt. 'Mir gebn ihr a Deckn. So schön is de Flitschn eh net, daß S Ihnas nackert auf de Wand hängen. Mir geben Ihr a Deckn, zum Zuadecken, bis zum Nabl, da liegts manierlich da, und i hab sogar no a Platzl Farb für de Haar über. De san zerraft und ghörn aa ausbessert.'

ここに引用したのは、オーストリアの新聞 "Neue Kronen Zeitung" の 'Heiteres Bezirksgericht' という欄からであるが、しかしこのような表記は、実際の音声発話とどの程度一致しているのかという点からすれば、むしろ標準語的な正書法表記を念頭に置いた上での、一種の妥協的な表記であるといえるものだ。

つまりそれは下に見るように、方言の音声をそのまま、文字化しようとするような、H.C.Artmann あるいは W.Teuschl などの作品と比較してみれば、容易に判断されるところである。まず、ウィーン方言で詩作を行った H.C.Artmann を取り上げてみることにするが、彼の詩集 "med ana schwoazzn dintn" の中の 'kawarebeag fotagrafian' の最初の部分は次のようだ。

med ana kamara
kawarebeag untn
med ana kamara
kawarebeag om
med ana kamara
auffe und owe

med ana kamara

geng an kawarebeag

geng de bamgraxla

きわめて極端な例をとりあげることとなったが、ある方言に関連してその標準的な言語表現との相違を問題にするとき、従来から往々にして、使用語彙の違いというものが前面に出てくる傾向があり、音声的差異については媒体の制限から、想像されるほど多くは取り上げられてこなかったともいえるであろう。

しかし H.C.Artmann などによる上記のような方言表記を見れば、共通語の語彙との関係で、その音声的差異がいかに大きなものであるかがわかる。この中の kawarebeag などは、どんな辞書（むろん地名辞典をも含めて）にもこのままのかたちでは載っていることはありえない。

kawarebeag とは、ウィーンの中心部からは少し離れたところにある地名で、通常は Kalvarienberg と綴られる。四旬節に市が立つことで知られたところであり、そこで売られているのが、H. C. Artmann が記すところの bamgraxla というもので、古くからある子供のための素朴な玩具のことだが、これも方言辞書でさえ、ふつう Baumkraxler と記され、標準的なドイツ語では Baumkletteler という説明が付されていたりするものだ。

この詩を見てもわかるように、H.C.Artmann は耳で聞くウィーン方言の音声を、出来るだけ忠実に文字化してみようとしている。同じ“med ana schwoazzn dintn” の中で、‘agazebam und kastanien’ という詩では、地区の名についても

iwa bradnsee und otagring

iwa meidling iwan laaabeag

auf simaring und flurizzduaf

auf duanboch und d brigitenau

bis hinta d oede donau ume

といったように記されている。ここで正書法的な意味で本来の書き方と一致している地名は、Meidling だけだ。Breitensee, Ottakring, Laarer Berg, Simmering, Floridsdorf, Dornbach などといった地名についてウィーンの人が発音したのを聞いたことがなければ、まったく意味不明の単語の羅列にしか思えない。

また先に取り上げた詩では、'agazebam und kastanien' のように樹木を書き記していたが、別の詩に中には bopöbam ということばがあらわれる。これはじつは、共通ドイツ語での Pappelbaum のことだ。方言風の表記を試みる多くの人においては、Påpelbam, Poppibam といった書き方がなされることはあるものの、これほど極端に、音声を文字化しようとする例は少ない。

というようりむしろ H.C.Artmann は、方言には基本的に正書法というものが存在しないものであるということを逆手にとり、ある語彙の本来の語源的属性や文法的な規則性といったものから抜け出させることによって、より積極的に実際の発話音に近似した音声の表記を試みようとしているのだともいえる。

H.C.Artmann あるいは下に例を出す W.Teuschl のように、いわば徹底して方言の音声を文字化しようという試みは、それほど多いとはいえないが、なんらかのかたちで、方言における発音が読み取れる方向で、それを文字化している例は頻繁に見られるものである。

しかし文字化という手段による表記にあたっては、音声と文字とがパラレルな関係にあることのほうがむしろまれである現実の文字体系を使わざるをえないということから、一定の制限が当然現れてくる。そのため、例えば "Das große österreichische Schimpfwörterbuch" のような特殊

な方言辞書にあっては、音声の文字化にあたって独特の扱いをする試みまで登場している。

つまりその解説部分には、次のような説明が述べられている。“Bei der Ordnung des erfaßten Wortschatzes wurde in diesem Buch aus sprachlichen Gründen das Alphabet nicht in der unbedingten Gesetzlichkeit der üblichen Reihenfolge geordnet und zwar sowohl im Anlaut als auch im Wortinneren. Wegen des in den bairischen Mundarten häufig zu beobachtenden Zusammenfalls von b und p, d und t, g und k wurden die beiden ersten Lautpaare gleichrangig behandelt. Bei g und k ist unter beiden Buchstaben zu suchen. Bei den Dentalen und Labialen wurde auch Verdoppelung dem einfachen Laut gleichgestellt. Ebenso wurden Doppelvokale, ie mit i, gleichgehalten sowie die Umlaute ä, ö und ü den Grundvokalen a, o und u beigestellt. Aus phonetischen Gründen finden sich k, c, ch sowie f, v, ph nebeneinander.”

ある発音が、音声的には同一視されうる場合、例えば明確には有声音と無声音とが区分されえないように発音されているときにも、むろんそれぞれの語彙において、その起源や由来には歴然とした差異があるのだが、すでに日常語化しているケースでは、そのような意識が働くことのほうがまれであろう。

“Das große österreichische Schimpfwörterbuch”では、すでにあまりに一般化しているためか、Tepp あるいは Depp という項目は存在しない。だが、他の方言辞書を見ると、ほとんどのものは、Depp も空見出しとして取り上げ、Tepp を参照させるようになっている。語源からすると、tappen が元だとされる言葉であるから、その指示は適切であるともいえる。ただし t音と d音を明確に区別しないオーストリアでは、むしろ実際

の発音はDeppという音としてとらえられている。

本来ゲルマン系である語彙や、かなり古い時代からドイツ語に入っていた語彙は、方言的な発音がおこなわれることが多いが、いまだ外来系の語であるという意識が残存している場合には、外来語の由来となった当該外国語の発音が、かなり残ったかたちに発音される。先にあげたH.C.Artmannの詩において、kastanienといった、本来ギリシア語、ラテン語からの外来系である語彙について、標準的なドイツ語と同じ綴りを用いて表記しているのも、そうした例のひとつとみなすことが可能であろう。

その一方、かなり純粋にゲルマン系とみなされる語彙については、標準的な発音からは大幅に離れた、きわめて方言的な発音が用いられているわけだが、外来語系の語彙に関しては、外来語であったという意識が次第に希薄になるにしたがい、発音自体も方言的な特徴を備えていくようになると考えられる。

ある外来系である語彙に、外来語的特性をまだ認めているか否かについての重要な判断基準のひとつとして、音声自体の自国語化（また方言にあっては方言的音声化）があげられるわけである。一例としてHabererという語を取り上げてみると、この語はもともとイディッシュ語のchawerが語源である。そこでウィーン方言でHabererとなる場合にも、a音はo音に近づくことがない。その点では、本来のドイツ語の語彙の場合におけるように、さきの例のDornbachの -boch とか、Håar auf die Zähnd といったウィーン独特の慣用表現にもみられる、a音がo音に近づいているのとは異なっている。

しかしW. Teuschlは“Da Jesus und seine Hawara”という書名で聖書のウィーン方言への翻訳をおこなっているように、方言ではw音とb音との区別も明確ではないわけで、Hawaraのほうがより語源的には合致

しているにもかかわらず、多くの方言辞書では Haberer を見出し語として採用している。

この "Da Jesus und seine Hawara" も、H. C. Artmann などとともに、方言で書かれたものとしてつねに言及がなされるものである。Hawara という語彙があらわれる最後の晩餐は次のように方言訳されている。

Drauf san de Hawara oogschoom, eine in d Schdod, und haum oes genau so gfuntn, wia r a s eana xogd hod, und haum oes sche heagrichdt.

Auf d Nochd daun is ea, da Jesus, mid seine Schbäze eigridn.

Und dawäu s ole gwikld und biaschdld haum, hod a xogd: "Fraunk, des muas i eich schoo song: Ana fo eich wiad mi fanaadan, ana, dea wos grod doda mid mia eischneidt."

というように、イエス・キリストにまでウィーン方言を話させてしまうというものだが、ここでも W.Teuschl が試みているのは、いかに現実の方言の発話音に近づけた文字化をおこなうか、ということでもあるのがわかる。

Habarer と書かれることが多いものの、しかし実際には Hawara のように発音されるこの言葉は、Rotwelsch と呼ばれる Gaunersprache から一般的な俗語的方言のなかに 20 世紀初めすでに入っていたものであり、外来語という意識は薄れているとはいえ、それが完全には取り去られていないのであろう。

Haberer は、似た形をした Haber とは歴史的には異なっている。Haber は、現代の標準的なドイツ語では Hafer となるが、中高ドイツ語では haber であり、古高ドイツ語では habaro であったものだ。そこで Haberのほうは、方言では Håbern となり Howan のように発音される。

ところが Haberer から派生した、(大いに) 食べるといった意味の habern のほうは håbern とはならず、下の W.Teuschl のマルコ伝の訳にあるように、Hawan と発音されるわけである。

外来系の語彙という意識がどの程度働いているかによって発音面での相違が起こってくるとみることができるが、しかし、本来は外来語であるのに、ほぼ完全に方言化してしまった語彙も多い。そこでウィーン方言で時折耳にする Bahöl を取り上げてみことにする。

Bahöl は Pahölと書かれることもあり、ハンガリー語の páholni か、あるいはイディッシュ語の palheから入ったのではないかとされている。しかし Pahöl, Pahöll といった文字化がされることもあるものの、実際の発音は下記のような Bahöö に近い。Bahöll と書かれたものもあり、以前は ö音は短く発音されていたようだが、現代ではしばしば Bahöö といった書き方も見うけらる。 W. Teuschl の "Da Jesus und seine Hawara"の中のマルコ伝第六章の部分の訳は、

Nocha hod z zu eana xogd: "Gäz, gem ma alaa in d Aaschichd ausse, duat kenz eich a Randl ausrostn." Wäu es woa in ana Dua so a Bahöö, das s ned amoe zan Hawan san.

となっており、長音化の傾向にあるのは事実のようだ。

外来系の語彙であるという認識が薄れ、自国語化あるいはいわば自方言化されていく過程においては、音声的特徴における原語の特性の喪失、またそれにともなう文字化の変容などがあげられる。

しかし、自国語化していくことによって、本来の外来語の音声が消滅してくとは必ずしも限らないこともある。Kai という語は、標準ドイツ語では [kaɪ] と発音されるが、ウィーン方言では [ke:]である。ただし綴り自体は Kaiのまま記される。そもそも Kaiという語はオランダ語の kaai からドイツ語に入ったとされているが、さらにさかのぼればフランス語の

quai [ke] がオランダに伝えられたものであるらしい。そこでフランス語の影響の強かったウィーンでは、むしろオランダ語的にではなく、フランス語風の発音がなされてきているのだともいえるだろう。

このようにみると、外来語受容は一面的な考察では不十分であり、ある国における政治的・社会的状況をも視野に入れた上で考えていかなければならないものだ。とりわけ他のヨーロッパ系の言語から外来系の言葉として入った語彙の場合、多くが同じラテン文字を使用しているということもあり、外来語としての意識がどの程度働いていたのか、また現に働いているのかは、判断が困難なところでもある。

その点では、外来語には通常、片仮名使用をおこなっている日本語とかなり相違している。またさらに日本語の場合、外来語として取り入れられる際に、しばしば専門用語的なもの、Jargon的なものとして片仮名表記によってまず使用されることも多いので、ある外国語の語彙が持つ本来の語義の広がりからすれば、その特殊な一部分のみが取り入れられているということが、よく起こることになる。

それは、ラテン文字をそのままの形で記すヨーロッパ系の言語同士の外来語使用にあっては、外来語の語彙の意味をすべて担ったままで別の言語に取り入れられていく可能性が高いということと比較して大きく異なった面である。日本語のように外来語に対して特別の文字、片仮名をあてる習慣のある言語と違い、外来語であっても自国語の単一的な文字体系によってそれを表記してしまうことが可能だからだともいえる。

ラテン文字を使用する言語にあっては、外来語の音声表記のために特別な手段を用いることがないわけではないが、むしろそのように特殊な方法で音声を表記しようとするのは例外的なことであろう。上で方言的な発話音を多く例にとって見てきたように、実際の音を音標記号などを使用せずに書きあらわそうとするのは、主としてラテン文字を音声表記手段として

も用いてきたからであるが、しかし片仮名という文字体系を持つ日本語では、片仮名が外国語音の擬似的な音声表記手段のための文字とされているために、むしろそれが外国語音の習得にとっては障害ともなりうる可能性が否定できないものの、通常外来語などについて用いられ、しかもある程度までは外国語音を表記することが出来得るのだと一般には考えられてしまいがちだ。

そのため音声表記自体は、平仮名などの文字体系とほんの一部を除き変わりがない片仮名で、外国語音を表記する習慣となっているわけだが、外国語音には当然のことながら、片仮名表記体系では表し得ないものがあるという意識が、この表記はあくまでも擬似的な手段に過ぎないにもかかわらず、必ずしも明確化されていないという問題が、日本語における外国語音表記には依然として続いている。

Literatur

H.C.Artmann: med ana schwoazzn dintn. 1958

Jakob Ebner: Wie sagt man in Österreich? 2.Aufl. 1980

Hans Hauenstein: Wiener Dialekt. 2.Aufl. 1978

Julius Jakob: Wörterbuch des Wienerdialektes. 1929

Günter Jontes: Das große österreichische Schimpfwörterbuch. 1987

Friedrich Kluge: Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache. 22.Aufl. 1989

Wolfgang Teuschl: Da Jesus und seine Hawara. 6.Aufl. 1994

Wolfgang Teuschl: Wiener Dialektlexikon. 1990

Peter Wehle: Die Wiener Gaunersprache. 4.Aufl. 1977

Peter Wehle: Sprechen Sie Wienerisch? 1980